『源氏物語』「関屋」巻の空蟬の造型をめぐる小考

呉　羽　長

一

明石から召還されて政界に復帰した源氏は「澪標」巻での住吉詣でにひきつづき「関屋」巻で石山寺に詣でた。途上逢坂の関山で任解けた常陸介（「帚木」巻「空蟬」巻では伊予介）に従って上洛しようとするその妻空蟬と邂逅する。かつて十七歳の折、紀伊守（「関屋」巻では河内守）中川邸での逢瀬から十二年の歳月が流れていた。それぞれその長い歳月を孤独に生きここにめぐりあったことの感慨が今あらたにわきあがり、二人はかつての実らぬ恋の媒介者小君（衛門佐）を再びのなかだちとして歌をよみあうのであった。

このように空蟬との再会を叙する「関屋」巻は、若き源氏が関りをもった中の品の女性の後日譚というモチーフをもち「澪標」「松風」「絵合」と続く本系の巻々から独立し完結した構図によって書かれたという点で、「澪標」巻のもう一つの併び「蓬生」巻と共通性が見出せる。両者のうち「関屋」巻の場合は、「蓬生」巻において開示された時流に動く世の人々の心に拮抗する美しい魂の姫君の受難とその克服という小さな浪漫世界が閉じられたあとをうけて、いまひとたびそうした独立したあそびの空間を空蟬登場において展舒しそれによって十七歳の時以来別れていた空蟬との関りを整理しようとするものであったろう。

ただしこの巻には「蓬生」巻にあるような物語性はない。池田利夫氏が、

（前略）関屋巻はあまりに淡く短い。永い歳月はお互いの年齢を加え、激情に走った昔日の面影は取り返すべくもないとしても、これはいかがしたことであろうか。空蟬はまさに受領階層の女であり、しかも源氏をうち捨てて姿を消した女性である。その後の消息を敢えて伝えなくてもよいくらいではあるが、もし伝えるというならば、もう少し話があってもいいのではないか。別な言い方をするなら、この程度の話であるなら、わざわざ一帖を構えて語るまでもないのではないか、ということである。

といわれる[1]ゆえんでもある。こうした「関屋」巻を描くことにはいかなる意味があったのか。それは「蓬生」巻に対応して空蟬の整理をおこなう際、昔日の恋という物語性に依拠してそこに再燃する情熱を作者の心情的レベルに近いところで描いているという点から考えるべきであろ

う。およそ空蟬は、その境遇・思惟の形の近似性から作者の自画像・分身であるという指摘が従来なされている。そうした指摘は、空蟬を自意識としての宿世意識を強くもつ人物として捉える藤田加代氏の論[2]によってもうらづけられるところである。「身」「憂し」ということばが他の作中人物の場合よりも多用され、身の憂さがすべての認識の基盤になるという空蟬の生意識は作者紫式部が現実に生きる精神的位相に近いのではないか。このような作者の心情的分身たる空蟬がその日常性から離れて物語的雰囲気の集約たる源氏に出逢い「昔を回想して、その甘くやるせない情感の中に一時を酔ふといふ、哀しくも複雑な女の心理」[3]を体験することがここでのあそびの特質であり、そこに作者にとってのロマンがあったのであろう。栄華の自信に満ちた源氏と身の憂さを自覚する空蟬の間の懸隔[4]は既に自明のことであった。その厚い隔壁をこえて人間として通いあう魂を空蟬側の憧れとしていまひとたび描こうとしたのがこの巻の趣旨であったろう。そうした「いまひとたび」の出逢いを自己の生涯の華やかないっときとして演じた後空蟬は老夫の死に際会し尼となって物語の舞台から退いていく。

二

空蟬が尼となる事情については「関屋」巻末に次のように述べられている。

かゝる程に、この常陸の守、老(い)のつもりにや、悩ましくのみして、物心細かりければ、子どもに、たゞ、この君の御事をのみ、いひ置きて、

「よろづの事、ただこの御心にのみまかせて、ありつる世に変らで、つかうまつれ」

とのみ、明け暮れ、言ひけり。女君、「心憂き宿世ありて、この人にさへおくれて、いかなるさまに、はふれ惑ふべきにかあらむ」と、思ひ嘆き給ふを見るに、

「命の、かぎりあるものなれば、惜しみとゞむべき方もなし。いかでか、この人の御ために、残し置くたましひもがな、わが子どもの心も知らぬを」

と、うしろめたう、悲しきことにいひ思へど、心にえとどめぬ物にて、亡せぬ。しばしこそ、

「さ、のたまひしものを」

など、情づくれど、うはべこそあれ、つらき事多かり。とあるも、かゝるも、世のことはりなれば、身一つの憂き事にて、嘆き明かし暮らす。たゞ、この、河内の守ぞ、昔よりすき心ありて、すこし情がりける。

「あはれにのたまひおきし。数ならずとも、おぼしうとまで、のたまはせよ」

など、追従し寄りて、いと、あさましき心の見えければ、「憂き宿世ある身にて、かく生きとまりて、はて〳〵は、めづらしき事どもを聞きそふるかな」と、人知れずおもひ知りて、人に、「さなむ」とも知らせで、尼になりにけり。人々、「いふかひなし」と思ひなげく。守も、いと、つらう、

「おのれを厭ひ給ふほどに。のこりの御齢は、多くものし給ふらん。いかでか、すぐし給ふべき」

など、

「あいなのさかしらや」

などぞ、はべるめる。（一六六～一六八ページ）[5]

このように、源氏との邂逅ののち夫常陸介に先立たれた空蟬は、その後夫前妻の子供達の冷遇に加えてその一人たる河内守の邪な懸想を受け、醜聞をおそれて出家にふみきるのであった。こうして「関屋」巻は閉じられる。出家した空蟬についてはこのあと「玉鬘」巻[6]「初音」巻[7]で源氏の庇護の下尼姿でつつましく二条東院に暮らす姿がみえる。この間空蟬が源氏の庇護下に入る経緯については何も語られない。それは、「蓬生」巻末尾で既に末摘花の二条東院への移りが述べられておりそれが「玉鬘」巻以降の末摘花と源氏の関係に繋っていることと比べて唐突でいかにも不自然である。「関屋」巻において空蟬が東院に吸収される予定などが述べられていないことでそのような印象をもつのだが、思うにそれはこの時点では彼女の移りが目論まれていなかったことによるものではないか。空蟬は「帚木」「空蟬」の巻々では思慮深く誠実な人妻として源氏に対しては「つれなさ」を貫き、この「関屋」巻にあってもそうした人間像としての設定の上に源氏との出逢いといういっときのロマンに浸ることがテーマとなっている。常陸介の死と空蟬の出家を語るエピソードの前に「あはれもつらさも、忘れぬふし」と、思し置かれたる人なれば、をり〳〵は、猶、のたまひうごかしけり」（一六六ページ）という記述があるが、それは空蟬のこうした人柄を見越した上で二人の間の距離を保ち持続的な形でその関係を一応完結させようとするものだったろう。この巻のはじめの目的はこの件りにおいて達成されたものと思われる。ところが更に空蟬の境涯が述べられ、前の掲出文にあるよう寡婦となった果てに彼女は出家する。ひいては「玉鬘」巻にみえるように源氏の庇護下に生きる彼女の姿を導くのである。

このように空蟬の境涯の急変を語るエピソードが最後に付加されることには作者紫式部の現実の体験が大きく関与していたと思われる。式部の原体験と空蟬の処生との関連について、岡一男氏が紫式部の夫宣孝が死んだ長保三年の初夏ごろに彼の長男隆光が継母式部に恋慕しかけたらしくそれがこの「関屋」巻の空蟬と河内守とのことのモデルとなっていると推測されているということであるが[8]、また『紫式部集』にある次の贈答三首は式部が夫を失った年の暮から翌年正月にかけてある男に求愛されそれを拒む姿をみせており、その姿は「関屋」巻の空蟬のそれと重なるところが多いと思われる。

門たたきわづらひて帰りにける人の、つとめて

49世とともにあらき風吹く西の海も磯べに波も寄せずとや見し

と恨みたりける返り事

50かへりては思ひしりぬや岩かどに浮きて寄りける岸のあだ波

年かへりて、「門はあきぬや」といひたるに

51たが里の春のたよりに鶯の霞に閉づる宿を訪ふらむ[9]

前述のような作者紫式部と作中の空蟬の間の近似性（境遇・思惟など）に加えてここでも年の隔った夫の死後他の男（それが式部の場合も夫前妻の子である可能性がある）の恋慕をうけるという形の類同性がみえるわけであり、式部の現実の体験が大きな衝迫の力となって、源氏再会後の空蟬の窮状を造形していったことが容易に想定できる。そして更にその窮状をおしすすめて彼女の出家まで描くことになったのであろう。

三

しかしそうした空蟬の生のつきつめは作者自身にとっても十分納得のいくものではなかった。ここで空蟬の窮状とその果ての出家を語る掲出文の末尾、

「あいなのさかしらや」などぞ、はべるめる。

に注目したい。このことばについて旧来「作者詞也」（『一葉抄』）、「草子地也」（『細流抄』）、「式部か心也」（『休聞抄』）、「紫式部か詞也」（『孟津抄』）、「例の式部我作物語ならぬやうの書さま也」（『湖月抄』師説）などという注がなされている。これらは「あいなのさかしらや」以下全体を草子地と解し、河内守の「のこりの御齢は、多くものし給ふらん。いかでかすぐし給ふべき」という不快な発言に対してそれを余計なおせっかいと反駁する批難のことばを話主が紹介する形を呈しているものとしている。そしてその批難をする主体は世間の人々としておおむね考えられているわけだが[10]、その場合当事者以外うかがい知ることのできないような個人的内容を世評がとりざたする態となり不自然な感じがする。やはり河内守の空蟬への恋慕及びその恋慕の拒まれたくやしさ等心情的機微は世評の穿鑿の範疇をこえているのではないか[11]。まして恋慕の対象が世間のとりざたの目を極度に避けようとする空蟬であってみればなおさらのことである。このように考えると「あいなのさかしらや」と評する主体が判然としない。あるいはこのことばは作中場面から語り場面に脱け出した話主に対して同じく語り場面にいる聞き手の河内守への批難とも考えられそうだが、それにしてはこの件りはそうした語り場面での話主と聞き手の対応を示す叙述とするには、他のその類の叙述と比べて余りに簡略である。

思うにこの「「あいなのさかしらや」などぞ、はべるめる」ということばは、その前の河内守の言に対しておせっかいだという非難をのせたものではなく、『首書源氏物語』或抄、『玉小櫛補遺』、山岸徳平氏[12]らの考説のように「あいなのさかしらや」をも河内守の言として「おのれを厭ひ給ふほどに。云云」と併列させ[13]、「はべるめる」のみを話主の詞（草子地）とするのが妥当であろう。つまり空蟬の出家に対し「おのれを厭ひ給ふほどに。云云」と河内守が言ったあと更に「あいなのさかしらや（つまらない賢女がましい利口ぶりよ）」[14]と恨みがましくとがめているのを話手が「はべるめる」として語り伝えているものと解するわけである。

このような解釈を採る場合、最後に「はべるめる」とあることは、河内守のことばを伝える話主が作中場面から「離れ」をもち語り場面へあらわれるという形を呈していることであるが、そうした形はこの時点で河内守のことばが物語を操作する作者の内奥への圧迫・感情の凝縮を惹起し、作者は一般的普遍的な視野へその意識を移動させてそこで内省をおこなったことによる。「はべるめり」に含められた敬意はそうした作者の心理的こころもとなさを示すものであろう。つまり自身が展開し帰結させた空蟬の生の姿が河内守の論理からすれば不自然さを内包していることを認め、その空蟬の生をおしすすめつつ展舒してきた世界を相対化することになったわけである。およそ作者紫式部が現実で体験した夫亡きのちの他の男からの懸想は、その発覚などを思うとき彼女の恥の意識を刺激し身の憂さの自覚と交響して、そこから逃れるための窮極の形として彼女に出家を思い致させることがあったであろう。そうした作者

の実人生での事件に執着するところから、源氏との出逢い以後の空蟬の生が述べられていくのであるが、作者はその生々しい体験に促されて空蟬を截然と出家に到らしめる。しかしその操作は現実の論理から離れた潔癖な観念的なものであった。作者の内なるもう一人の自己が河内守の言によってその不自然さを認め、一般的な視野から空蟬のかたくなとも思われる出家の遂行に訝しみがなされたわけである。「などぞ、はべるめる」はこのように作者が空蟬の出家をおしすすめたことの心的圧迫が自然とあらわれたものであろう。

なお展舒してきた作中世界をこうして作者が相対化する姿は前の「蓬生」巻にも見られたものである。「蓬生」巻では従来(「末摘花」巻)の末摘花像――愚かしいほど古風で引込思案な醜い姫――を変えてまでその物語の状況に没入し、その必然的展開を独自におしすすめていったが「澪標」「絵合」といった本系の巻々の路線との対照の中でそこへの立ち戻りのためこの巻の必然的展開を掣肘することになり、そこで心的圧迫を伴う「離れ」(相対化)が草子地をもっておこなわれることになったわけである。[15]「蓬生」巻の草子地に比べて「関屋」巻のこの件りのそれはそれほど大きな不自然さに発する「離れ」を示していない。しかしそれにしても物語の予定された枠からいっとき脱してあそびの小世界に浸った際作者が自身の生意識をこの作中世界に内在化させて更にそれをおしつめ、果てはその行き過ぎ(本来の物語の枠からの逸脱、あるいは実人生からの衝き上げによる作中人物の観念的帰結)を感じ、その行き過ぎ(もしくは行き過ぎを修正しようとしてあらわれた不自然さ)を草子地の要請によって相対化するという形は両者共通するものであろう。これら二帖のそうした傾向、つまり当初筋の発展性の少ない巻としてその展舒が目論まれながら物語の自律的進展が予想以上に促されてそれによる作品世界の偏向を自覚、ひいては掣肘せざるをえず、そうした営みが草子地においておこなわれるというありようは更に玉鬘十帖に至って度を強める。これらの巻々では更に当初の設定の枠から離れ自律的にふくらもうとする物語を、本来のその枠組のレベルから掣肘する草子地が多用される。しかしこうした草子地による掣肘は作中世界外からのその世界への相対化であり、その無力さの確認の上で相対化の目が作中世界に入り込んで〈見る〉視座を形成し、こうして物語の多層化を促していくのである。ひいては「若菜」上巻以降その視線の錯綜の中で自己の〈見られる〉意識を鋭敏にはたらかせる女主人公があらわれ、更に作者の思いの内在化を助長して物語の方向を決定していく。[16]

四

以上述べてきたような経緯を内包して空蟬の出家は描かれる。はじめ俗にあって源氏との距離を保ちながら以後の生を送るはずの彼女であったが、出家をおこなうことで彼女の精神的特性としての「つれなさ」、源氏に対する拒否の姿勢は取り去られる。それは源氏の庇護を容易にするものであったが、また尼になることは二人の間に恋愛がむやみに発展する可能性も摘まれることであり彼女の二条東院への吸収は他に影響を与えることもなく更に容易になったことであろう。こうして空蟬は末摘花と併んで東院に移される。東院で暮らす彼女の姿が「玉鬘」巻や「初音」巻に見えることは前に述べたとおりである。彼女は自身に関る可能性を放擲し源氏というロマンの集約を彼の庇護下の片隅ではるかに〈見る〉という形をもって静かに余生を送るのである。

（1）池田利夫氏「蓬生・関屋」（『源氏物語講座』第三巻、昭四六・七、有精堂）。

（2）藤田加代氏『「にほふ」と「かをる」』（昭五五、風間書房）。

（3）池田亀鑑氏『新講源氏物語』上巻（昭二六・二、至文堂）の「関屋」の件り。

（4）永井和子氏「空蟬再会」（『講座源氏物語の世界』第四集、昭五五・一一、有斐閣）など。

（5）『源氏物語』本文の引用は、山岸徳平氏校注『源氏物語』（日本古典文学大系、岩波書店）による。

（6）空蟬の尼君に青鈍の織物の、いと心ばえあるを見つけ給ひて、御衣、ゆるし色なるそへて。（「玉鬘」巻三七二ページ）

（7）空蟬の尼衣にも、さしのぞきたまへり。うけばりたるさまにはあらず、かごやかに局住みにしなして、仏ばかりに所得させたてまつりて、行ひ勤めけるさま、あはれに見えて、経・仏の飾り、はかなくしたる閼伽の具なども、をかしげになまめかしく、「なほ心ばせあり」と見ゆる、人のけはひなり。（以下略）（「初音」巻三八七ページ）

（8）『平安朝文学事典』（昭四七・五、東京堂出版）二二七ページ上段など。今井源衛氏『紫式部』（昭四一・三、吉川弘文館）一一一～一一二ページ参照。

（9）引用は山本利達氏校注『紫式部日記　紫式部集』（新潮日本古典集成、新潮社）所収の本文による。

（10）阿部秋生・秋山虔・今井源衛氏訳注『源氏物語』（日本古典文学全集）の訳文及び頭注、石田穣二・清水好子氏校注『源氏物語』（新潮日本古典集成）の頭注など。なお玉上琢弥氏『源氏物語評釈』でも世評と解する一説が掲げられている。

（11）「初音」巻ではこの河内守の懸想を源氏に知られ辛がっている空蟬の姿がみえる（三八八ページ）が、そうした懸想のうわさが世間に伝わっていたとしても、この時点で「のこりの御齢は、多くものし給ふらん」以下の河内守の内的思量が世間のとりざたとなるということはありえないのではないか。

（12）（5）の傍注及び頭注。

（13）（5）の本文では、「のこりの御齢は、多くものし給ふらん。いかでか、すぐし給ふべき」の次に引用を示す語として「など」とあり（大島本を底本とする諸テキストは「などぞ」）、前の河内守の言とそのあとの「あいなのさかしらや」という言との併立を比較的容易に考えることができる。

（14）（5）の頭注を参考にした解。

（15）詳細は拙稿「「蓬生」巻草子地試解」（『日本文学』第三三巻第三号、昭五九・三）参照。

（16）そうした作者の思いの内在化した〈見られる〉意識については拙稿「紫上の理想性の構造」（『島大国文』第一二号、昭五七・一二）参照。

（島根大学教育学部国語研究室）